

琉球大学学術リポジトリ

〈きこえる・みえる〉を述語にする文：
文の人称性とモダリティ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-08-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 三寿, Murakami, Mitsuhisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/34825

〈きこえる・みえる〉を述語にする文 — 文の人称性とモダリティ —

村 上 三 寿

【はじめに】

「うけみ構造の文」「やりもらい構造の文」「文の人称性」「自動詞のうけみとやりもらい」など、動詞述語文を対象にした記述的な研究をしながら、動詞述語文における主体と客体の関係が文の意味的な構造にどのようにうつしだされているのか、あるいは、文の人称性と文のテンポラリティが文のモダリティにどのようにかかわっているのか、検討をつづけてきたが、文のモダリティ全体をとらえていくためには、この先まだいくつか具体的に解決していく必要のある問題がのこっている。この報告では、〈きこえる・みえる〉を述語にする文について記述・検討しながら、文のモダリティ全体をとらえていくための手がかりのひとつをさぐっていきたい。また、そうすることで、奥田靖雄の「現実・可能・必然（上・中・下）」（1986・1996・1999）の理解にいくらかでも近づく準備としていきたい。

【1】〈きこえる・みえる〉を述語にする文

〈きく・みる〉を述語にする文が人間の知覚活動そのものをあらわしているとすれば、〈聞ける・見られる（見れる）〉や〈聞くことができる・見ることができる〉を述語にする文は、その知覚活動が可能であるということであらわす。さらに、このふたつのタイプの文とならんで、日本語には〈聞こえる・見える〉を述語にする文も存在している。この文がどういう主体・客体の関係を持ち、主語と述語の関係のなかでどういう意味的な構造をつくりだしているのかを検討してみる。ちなみに、日本語には〈思える・言える〉を述語にする文もあって、一見したところ似ているようでもあるが、これらは、いまのところは、〈走れる・歩ける・食える・使える〉とおなじ系列に属する可能動詞を述語とする文としてとりあつかっていいだろう。もしかりに、とりたててあつかう必要が

でてくる場合には、あらためて検討することにする。

・ 彼は	物音を	聞いた。
(主体)	(客体・対象)	(動作・知覚活動)
・ 物音が	彼に	聞こえた。
(客体・対象)	(主体)	(<u> </u>)

この〈きこえた〉を述語にする文が〈きいた〉とくらべて、どういう文法的な意味内容を実現しているかということである。

(1) 現象の実現の確認・物事の存在の確認

- 門をくぐると子供が太鼓を鳴らしている音が聞こえた。玄関へかかって案内を頼んでもその太鼓の音はやまなかった。(彼岸過迄)
- 三平は雑誌を読んでいたが、外の音に耳を引き立てていた。初め、街道の方から馬の蹄の音が聞えた。ついで、子供たちがバンザイと言ったらしい。(子供の四季)
- 横に女の顔をのぞきこんだ。女は三四郎を見なかった。その時三四郎の耳に、女の口をもれたかすかなため息が聴こえた。(三四郎)
- 物干しのあるところは台所の屋根の上にあたる。ちょうど、夜の十一時ごろ、その物干しの方で異様な悲鳴が聞こえた。家の人がそれを聞きつけて駆け上がって見ると、そこに青木が倒れていた。(春)
- 四時ごろ、善太と三平は山の上のお得意へ牛乳を届けた。帰ろうとすると、下の谷間の池がみえた。一人の釣師が盛んに鮎を釣り上げている。(子供の四季)
- 門をはいると、庭木戸が開いていて、縁側に老人が見えた。(子供の四季)

- 白樺なぞの混じった木立ちの中に、小屋へ通う細い坂道、丘の上の樹木、それから小屋の屋根なぞが見えた。 (千曲川のスケッチ)

- 涼しい風が部屋の片隅の低い窓から通って来た。小障子の開いたところから裏の空地にある背の高い柳の樹も見えた。 (桜の実の熟する時)

これらの例のように、〈きこえる・みえる〉を述語にする文では、主語の位置にあるのは〈きく・みる〉という知覚活動の対象となる物事や現象であって、人間は、その実現している現象や物事存在を具体的な時間のなかで確認している。〈きく・みる〉を述語にする文が、人間の主体的な知覚活動そのものをあらわしているとすればこのタイプの〈きこえる・みえる〉を述語にする文では、知覚によって確認される物事や現象が文の主体としてさしだされ、人間はそれらを確認する存在にとどまることになる。この種の文では、人間は、積極的な知覚活動の主体ではないものの、聴覚・視覚という知覚を通して現象を確認し、うけとめる主体ではある。

この種の文においては、それらの物事存在や現象の確認、人間の動作の確認などが、過去や現在の特定の時間のなかでなされていることがあらわされる。

【過去】

- 彼は決心して姿見の横に立ったまま、梯子段の上を見詰めた。すると静かな足音が彼の予期通り壁の後に聴え出した。その足音は実際静かだった。(明暗)
- 二度目に鮎太が一人で伊豆屋の中庭に立った時は、どこかの部屋からの宴会のさんざめきが川瀬の音に混じって賑やかに聞えていた。(あすなろ物語)
- もう日が高くのぼっていた。そこにもここにも烟が立って、目ざめた町の物音が、ごやごやと聞こえていた。(あらくれ)
- 静かな夜であった。上野の鐘は寂とした空気に響いて聞えて来た。(家)

- 「出た……出た……」「あれ、あそこに二十六夜さまが……」
……倫も海の方を見ると、この階下座敷の縁からも、ほのかな光に海面をぬいて肩を逆さにしたような織月の浮ぶのが見えた。 (女坂)
- 四囲にもりもりと波がムクレ上がってくると、海に射込む雨足がハッキリ見えた。それは原始林の中に迷いこんで、雨に会うのよりももっと不気味だった。 (蟹工船)
- 甲板を、マドロス・パイプをくわえた外人が二人同じところを何度も機械人形のように、行ったり来たりしているのが見えた。ロシアの船らしかった。 (蟹工船)
- 石垣の下の方には並んで釣をしている黒い人の影も見えた。セエヌの水も寂しそうに流れていた。 (新生)
- 静かな場所である。まだ藁屋根があった。山が片側にせまり、屋根の上には蒼い海が見えていた。 (点と線)
- 遠い八つが岳は灰色に包まれ、その上にあかい雲がたなびいた。次第に山の端も削いて、あかい雲が薄黄色に変わるころは、夜前まっ黒であった落葉松の林も見えてきた。 (千曲川のスケッチ)

【現在】

- 「ア-木曾川の音がよく聞える」三吉は耳を澄まして聞いた。 (春)
- 清三は眼が覚めて、何うしても眠られない。戸外にはサツと降って通る雨の音が聞える。いろいろな感があとからあとから胸を衝いて来て、胸が一杯になる。 (田舎教師)

●白い雲はあとから、あとから、飛んで来る。ところへ遠くから荷車の音が聞こえる。今静かな横町を曲がって、こっちへ近づいて来るのが地響きでよくわかる。三四郎は「来た」と言った。
(三四郎)

●相変わらず風雨のたうつ音が物凄く聞えている。稲妻も混っているらしく、時々雷鳴も聞えている。
(しろばんば)

●「そら、行ちゃん、国府津へ来たよ。」
「まだ海見えないね。」
「ほら、もう波の音が聞える。」
(くれない)

●つう (叫ぶ)
分らない。あんたのいうことがなんにも分らない。さっきの人たちとおんなじだわ。口の動くのが見えるだけ。声が聞えるだけ。だけど何をいつてるんだか……ああ、あんたは、あんたが、とうとうあんたがあの人たちの言葉を、あたしに分らない世界の言葉を話し出した……ああ、どうしよう。
(木下順二)

●竪に竹を打ち付けて、横に二段ばかり細く削った木を渡して、それを蔓で巻いた肘掛け窓がある。その窓の隙子が二尺ばかり明いていて、卵の殻を伏せた万年青(おもと)の鉢が見えている。
(雁)

●……ああ今は旅の古里である尾道の海辺だ。海沿いの遊女屋の行燈が、櫓のように白く点々と見えている。見覚えのある屋根、見覚えのある倉庫…(放浪記)

●「お民、来て御覧。きょうは恵那山がよく見えますよ。妻籠の方はどうかねえ、木曾川の音が聞えるかねえ」
(夜明け前)

●船が揺れた拍子に、波のあおりを食って、どの舟も一様にゆらゆらと小さな

動揺を始めました。為吉は舳へ行って、立ったまま沖を眺めました。

「やっぱり白山が見える!」

こう彼は口の中でつぶやきました。

(赤い鳥)

●海が見えた。海が見える。五年振りに見る、尾道の海はなつかしい。

(放浪記)

●やがて彼は久松橋の畔へ出た。町中を流れる黒ずんだ水が見える。空樽を担いで陸から荷舟へ通う人が見える。龍河岸に添うて斜に樽屋の店も見える。

(桜の実の熟する時)

これらの文では、過去や現在における物事の存在や現象の実現を〈きく・みる〉という知覚によって人間が確認したということ、あるいは確認しているということがあらわされている。文の主語には、その知覚によって確認されている物事や現象がすえられ、確認する主体はとくに文のなかにしめされなくても、会話文であれば〈はなし手〉であり、地の文であれば、かたり手によってさしだされている場面のなかでの登場人物（主人公）である。したがって、この種の文は、〈きく・みるという知覚による確認の文〉であるとひとまず言うことができるだろう。確認というのは、人間の意識的な認識活動のひとつであり、確認したということは、聴覚や視覚によって知覚したものが人間の意識のなかにはいりこんだということである。

この種の文では、その確認の主体としての人間が文のなかにあらわされない方が普通であるが、とりててさしだす必要がある場合には、〈～に〉のかたちをとってあらわされる。その〈さしだす必要〉というのは、〈他の人間には確認できないが、自分には確認できる〉か、またはその反対に、〈他の人間には確認できても、自分には確認できない〉ということをとりにて言いあらわす必要がある場合である。あるいは〈他の人間と同様に自分も確認できる・確認できない〉ということをとりにて言いあらわす場合である。

- しばらくすると、さっきの若者が、また、「変だな、僕には誰かが唄をうたっているのがきこえる。嘘じゃないよ。そら！ 三味線をひいて騒いでいるのが聞える。」といい出しました。(赤い鳥)
- ……だんだん声が高くなってきて、何を話しているか幸子にも聞こえてきた。(蟹工船)
- くちびるも何か言うように動いたようだった。が、言葉が出なかった。出たかもしれないが、幸子には聞こえなかった。(蟹工船)
- 「ホウラ。風間さんにも聞えなければ、僕にも聞えない。聞いたのは、唯君ばかりだ。神経、神経 - どうしてもそれに相違ない」(破戒)
- すると二人は小声で何か話し始めた。おれにはよく聞えない、又聞きたくもない。(坊ちゃん)
- 二階が交渉の間にあてられているので、梨花にはこぼれ話も聞えて来ない。(流れる)
- 薄紅い、しなやかな、女らしく肥った手は、暗黒にも岸本の目に見えた。峰子の手だ。(春)
- 人生を論じ、自然を説いて、徴を拆(ひら)き、幽を闡(ひら)く頭はあっても、目前で青二才のわたしが軽蔑しているのが、先生にはついに見えなかったのだ。(平凡)

(2) 現象の確認に対する判断や予想・主観的な想像

過去の具体的な特定の時間におこったできごとや、いま目のまえにおこっているできごとを人間が確認する場合、この種の文は、物事の存在や現象の実現

の〈知覚的な確認〉を表現していることになるのだが、これからおこる未来のできごとの場合や、確認する主体がはなし手以外の他の人間（二人称や三人称）である場合には、〈きこえる・みえる〉を述語にする文は、〈確認〉そのものではなく、そのできごとや物事の確認に対する〈判断や予想〉をのべることになる。

【未来のこと・二人称】

●（長女）よし坊ちゃん。

（三男）まだきこえるね、ねえちゃん。

（長女）ええ、まだきこえるわ。もうじき、土塀の家の角をまがると、きこえなくなるわ。ほら、もうもうきこえなくなったでしょう。

（三男）まだきこえるよ。

（長女）でももう蚊が鳴くほどだけよ。 （新美南吉）

●よばないときとおなじことに、ただかけまわって、にげたり、おいかけてりしていました。おにあそびかもしれません。「きこえないかな。いやいや、そんなはずはない。」 （浜田広介）

●「金太郎チャン、タコあげに行かないかい」

「だって、ボク、まだ病気がよくなるんだもん」

「いやだなあ。ボク、こんな所で絵なんか描いて遊ぶのいやだあ。タコがいいよう。プーン、プーンって唸ってんだもん。聞いてみろ、ね。聞えるだろう。あれ正チャンの三枚ダコだよ。行こうよ。いいじゃないか」

（子供の四季）

●「どうも……すみません、つい口癖になってしまっ……でも、今はいないからいいじゃありませんか」

「いないって……直き誰かの口から聞えますよ。私が辛い思いをするから……」 （女坂）

- あなたは東京が初めてなら、まだ富士山を見た事がないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない。 (三四郎)

- 「お婆さん、もう来ましたよ。ね、彼方(むこう)に見えるでしょう。三平君ちの家」 (子供の四季)

- 「どうです」「なんだかまっ黒ですわ」「まっ黒じゃいけませんね。も少し障子の方へ向いて、そう欠みを寝かさずに-そうそうそれなら見えるでしょう」 (吾輩は猫である)

- 「あの女」は室の前を通っても廊下からは顔の見えない位置に寝ていた。看護婦は入口の柱の傍へ寄って覗き込むようにすれば見えると云って自分に教えてくれたけれども自分にはそれを敢てする程の勇気がなかった。 (行人)

- 少佐はその光をおおぎながら、足音をぬすんで歩きつづけました。もうすこしいくと、つぎの歩哨のかけが見えようと思われるところで、少佐はどかりと足をふみはずして、……深いあなの中に落ちこんで…… (新美南吉)

- 「もう呼ぶな」と宮崎がしかった。「水の底の鱗介(いろくず)には聞こえても、あの女子(おなご)には聞こえぬ。……」 (山椒太夫)

- 君には侮辱と聞こえたかもしれんが、わが輩は忠告のつもりで言ったのだ。 (浮雲)

これらの例のように、確認をする主体が、はなし手ではなく、きき手の人間である場合には、〈きこえる・みえる〉を述語にする文は、はなし手自身による確認ではなく、きき手の人間が知覚によって確認することへのはなし手の〈予想や判断〉を表現することになるだろう。三人称の人間や未来のできごとの場合

にも、同様に、確認そのものではなく、確認に対するはなし手の予想や判断をのべている。

【主観的な想像・主観的な判断】

一人称の人間の場合であっても、頭のなかの出来事として、想像の世界のことをのべている場合には、〈きこえる・みえる〉を述語にする文の主語にしめされている物事や現象は、はなし手が知覚的に確認しているものではなく、人間の主観的な想像にすぎない。

- 「私はつらい目にあうと、あのスプリング・ソナタを、思い出すことがありますわ。ここにこうしていると、ピアノの焼跡から、あの曲が聞いて来ますわ。」
(舞姫)

- もつと、もつと、まだ、まだ！

雪枝の声が、時々しんとした頭の中で、波の音に混じって聞いていた。
(あすなろ物語)

- 不思議にもこの異郷の客舎で、岸本の心は未だ曾て行ったことの無いほど近く父の方へ行くように成った。父の声は復た彼の耳の底に聞いて来た。(新生)

- かれこれするうちに、想像が切れぎれになって、白い肌がちらつく。ささやきが聞こえる。末造はいい心持ちに寝入ってしまった。そばに上さんは相変わらず鼾をしている。
(雁)

- お玉はあとにそのまま動かずにいる。……袂からハンカチーフを出して押えた。胸のうちにはただ悔やしい、悔やしいという叫びが聞こえる。これがかの混沌とした物の発する声である。
(雁)

- この世が醜くすぎる。悲しすぎるのだ。倫の見つめる月の光にはしかし、仏の

影は浮ばないで、白い蝶が二つもつれて淡い霧の中に飛び交って見えた。

(女坂)

●飛行機かしら、モーターボートかしら……私の錯覚から、白い泡を飛ばしている海の風景が空の上に見えてきました。

(放浪記)

●あの土地には、私と品子の舞踊の夢がこもっているんですもの。私の若い時、品子の幼い時からの、踊りの精が、あすこにいますの。あすこには、いろんな踊りの幻がいつも私に見えていますの。あの土地を、人手に渡せないわ。(舞姫)

主語の位置にあるものが抽象的なことからである場合には、それはもはや〈知覚によって確認〉されるような対象ではなく、人間の直感や感性や思考によって確認される〈主観的な想像・主観的な判断〉がのべられると言った方がいだろう。

●しばらくして思い切ったというように、新しい教師は顔を挙げた。髪の毛の伸びた額の広い眉の濃い其の顔には一種の努力が見えた。

(田舎教師)

●お勢も今日はとりわけ気の晴れた面相で、さながら籠を出た小鳥のごとくに、言葉はもちろん歩きぶり身体のかなしにまでどことなく活々とした所があつて、冴えが見える。

(浮雲)

●なるほどそう思つて見ると、どうかしているらしくもある。色つやがよくない目じりに堪えがたいものうさが見える。

(三四郎)

●そこまで考え続けると、おせんのことばかりでなく、大塚さんは自分自身が前よりはハッキリと見えて来た。

(旧主人)

●運太郎の談話 (はなし)の中には丑松の心を動かす力が籠っていたのである。

尤も病のある人ででも無ければ、ああは心を痛めまい、と思われるような節々が時々その言葉に交って聞えたので。 (破戒)

- 恥を言わねば理が聞こえぬというから、わたしは理を聞かせるためにあえて恥を言うが、ポチは全くわたしの第二の命であった。 (平凡)

この種の文における想像や判断の主観性は、「自分には・一には」のように、想像する人間や判断する人間がとりたててさしだされるとき、〈他の人にはそうではなくても、自分にはそうだ〉というような意味あいをもちながら、その主観性がいつそう強まることになるだろう。

- 男と女の相違が、今は明らかに袖子に見えて来た。 (嵐)

- 残金は一円五十銭也。月が風に吹かれているようで、歪んだ高い窓から色々な光の虹が私には見えてくる。 (放浪記)

- 遠い外国の旅 — どうやらこの沈滞の底から自分を救い出せそうな一筋の細道が一層ハッキリと岸本に見えて来た。 (新生)

- 橋よかかれ！ さっとわたしが人サシ指を前にのぼすと、海の上にはたちまち橋がかかる。りっぱな虹のようにきれいな橋です。わたしだけに見える、そしてわたしだけがとおれる橋なのです。 (二十四の瞳)

- とにかく、家がなくなることは繋がるもの全部にかかわることだが、梨花には誰の顔も浮ばなくて猫の顔が見える。 (流れる)

このような主観的な判断をあらわす文が〈～が～にみえる〉のタイプの構造をとるとき、発見的な意味あいをおびてくる場合がある。自分が確認した判断の内容を、〈～に〉でさしだされている部分のなかにみつけたという表現になる。

- 櫛をふいていたお玉は「あら」といって振り返った。顔に不安らしい表情が見えた。 (雁)
- 佐佐の顔には、不意打ちに逢ったような、驚愕の色が見えたが、それはすぐに消えて、険しくなった目が、いちの面に注がれた。 (最後の一句)
- しばらくたって、帰ってきたおゆうの顔には、鶴さんのためなら、何でもしかねないような浮いた大胆さと不安が見えていた。 (あらくれ)
- 猜疑は次第に深くなり、忿恨は次第に盛んになった。門に迎えた緑翹の顔に、常でない侮蔑の色が見えたようにも思われて来る。 (鷗外)

しかし、〈きこえる〉を述語にする文が、〈～が～に きこえる〉のタイプの発見的な構造をとったとしても、抽象的なことがらの場合でなければ、主観的な判断という意味あいはいはみとめられず、〈～に〉でさしだされているものは、具体的な音や声などの現象を聴覚で確認したその場所・ありかをあらわすにすぎない。

- チチ、チチ、チチ……天守閣の廂(ひさし)の裏に、燕のさえずりが聞えだした。海を渡って、春は来たのだ。 (宮本武蔵)
- 言っているところへ、ドアにコツコツ音が聞える。一瞬老会は温厚の紳士に変わる。 (子供の四季)
- もうすっかり日がくれて蛙の声が静かな野中に聞こえ、人家には灯がともされていた。 (あらくれ)
- もう五月の新緑があたりを静かにして、老鶯の声が竹藪の中に聞えた。 (田舎教師)

(3) 認識・判断の内容

この種の〈きこえる・みえる〉を述語にする文のなかには、知覚され、確認される物事や現象について、人間がどのようにうけとめ、認識し、判断しているのか、その判断の内容がさしだされている場合がある。この場合、その物事や現象に対する人間の判断、認識的な態度が表現されることになり、人間の主観的な態度・評価的な姿勢をのべる文となっている。これらは、たとえば ～と きこえる (みえる)・～にきこえる (みえる)・～のように ・～のごとくに)のようなタイプの文の姿をとりながら、しだいにモーダルなタイプの文に移行していくことになる。

【 ～と きこえる (みえる) 】

- 叔父だから他人より親切だと言われる。しかし今のお言葉はあなたの口から出たにもかかわらず、他人よりも冷刻なものとしか僕には聞こえませんでした。
(彼岸過迄)
- 「ところがネ、僕はマイるものなら、この一二年にマイってしまいそうな気がする……」この岸本の言葉は二人の学友には申談とも聞えたか知れないが、彼自身は自分で自分の言ったことを笑えなかった。
(新生)
- けれども三四郎の耳には明らかにこの一句が、すべてに捨てられた人の、すべてから返事を予期しない、真実のひとりごとと聞こえた。
(三四郎)
- 月の光で、よくそのじいさんのすがたを見まると、やぶれた洋服を着て、古くなったぼろ靴をはいていました。もうだいぶの年とみえて、白いひげがのびていました。
(小川未明)
- 太夫はあざ笑った。「愚か者と見える。名はわしがつけてやる。姉はいたつきを垣衣(しのぶぐさ)、弟はわか名を萱草(わすれぐさ)じゃ。垣衣は浜へ行って、日に三荷の潮をくめ。萱草は山へ行って日に三荷の柴を刈れ。……」(山椒太夫)

●「君はよっぽど気楽な性分と見える。それがほんとうのところなんですか」
(それから)

●「……このあいだある文学雑誌を見たら苦沙弥君の評が出ていましたよ」「ほんとに？」と細君は向き直る。主人の評判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える。
(吾輩は猫である)

これらのタイプの文における〈判断の内容〉は、ひとつの名詞でさしだされることもあるが、文としてさしだされたり、動作としてあらわされたりすることもある。この種の文では、人間が知覚によって確認した物事や現象や人のありさまについて、自分がどのようにうけとめているか、そこから何が考えられるか、自分の〈判断〉をのべていることになる。

●ただ美禰子だけが広田先生の陰で、先生がさつき脱ぎ捨てた洋服をたたみ始めた。先生に和服を着せたのも美禰子の所為と見える。
(三四郎)

●差しむかいになって、ゆき子が坐った。ゆき子は風呂上りと見えて、血色のいい手をしていた。
(浮雲)

●土瓶の中のはお茶ではなかったと見える。僕は何を飲んだのか、今も知らない。
(キタ・セクスアリス)

●「やっぱりそうか」と言ったが、冗談でもなかったと見えて、別に笑いもしなかった。
(門)

●汁椀の中へ親指をつっ込む山出しの女でも、美しいお玉を気にして、立ちぎきをしていたものと見える。
(雁)

●「二三日前年始にゆきましたら、門の内でお下女と羽根をついていましたから、

病気は全快したものと見えます」

(吾輩は猫である)

- すみ子は茶を入れるつもりと見えて、湯わかしを持ち、廊下へ出て何やら女同士で話をしていたが、すぐ戻ってきて…… (シ墨東綺談)
- 手を延ばして押入れをあけて見る。白菜の残りをつまみ、白い御飯の舌ざわりを空想するなり。何もないのだ。涙がにじんで来る。電気でもつけましよう……。 駄菓子ではつまらないと見えて腹がグウグウ辛気に鳴っている。隣の古着屋さんでは、秋刀魚を焼く強烈な匂いがしている。 (放浪記)
- 泊り客もあまりないと見えて、静かな宿であった。 (浮雲)
- 大きい青大将が首を籠の中に入れているのである。頭を楔のように細い竹と竹との間に押し込んだものと見えて、籠はちよつと見た所では破れてはいない。(雁)
- 女はやがてふろしき包みを元のとおりに結んだと見える。蚊帳の向こうで「お先へ」という声が出た。 (三四郎)
- 弟は、やつと姉のいうことがわかったとみえて、だまっとうなずきました。 (小川未明)
- 「君も車屋の猫だけにだいぶ強そうだ。車屋にいるとごちそうが食えると見えるね」 (吾輩は猫である)

このタイプの文は、確認した物事や現象について、その内容にまでふみこんで判断し、その判断した見解を表現している。

【 ～に きこえる (みえる)】

〈 ～に きこえる (みえる) 〉のタイプの文は 〈 ～と きこえる (みえる) 〉

のタイプの文と、構造的にも意味的にも、よく似かよっているところがあって、いずれも確認した物事や現象に対する判断や見解、認識的な態度を表現しているともいえる。しかし、その判断や態度にはちがいもみつけることができる。

●「はなはだ勝手に申し上げて済みませんでございますが、雨の降らない日においてを願えますまいか」と言った。今まで就職運動のため諸方へ行って断られてきている敬太郎にも、この断り方だけは不思議に聞こえた。（彼岸過迄）

●「瀬川君、どうですか、御病気は —— 」と文平は意味ありげに尋ねる。その調子がいかにも皮肉に聞えたので、準教員は傍に居る尋常一年の教師と顔を見合せて、思わず互に微笑を泄した。（破戒）

●岡田は苦笑しつつも雁を持った。どんなにして持って見ても、外套の裾から下へ、羽が二三寸出る。その上外套の裾が不格好に広がって、岡田の姿は円錐形に見える。（雁）

●その自転車が新しく光っていたから、その黒い手縫いのスウツに垢がついていなかったから、その白いブラウスがまっ白であったから、岬の村の人にはひどくぜいたくに見え、おてんばに見え、よりつきがたい女に見えたのであろう。（二十四の瞳）

●倫はふと、この子持ちの間にある空の膝を見出した。須賀の膝だった。その膝は不思議に空虚に見え、須賀の顔よりも遙かに雄弁に須賀の孤独を語っていた。（女坂）

●玄関の片隅の方を眺めると、壁によせて本箱や机などが彼を待受け顔に見えた。（桜の実の熟する時）

●遠近(あちこち)の木間隠れに立つ山茶花の一本は、枝一杯に花を持ってはい

れど、犖々(けいけい)として友欲しげに見える。 (浮雲)

●「そうでしょうか」と細君は首をひねったまま納得しかねたというふぜいに見える。 (吾輩は猫である)

●足もとの草むらに野生の苺を見つけてみた。まあ何て綺麗なのだらう苺は。
-細い刺のある蔓、ぎざぎざのある小さいハート形の葉まで、何か驚くべき美しいものに、それがその瞬間見えた。 (真知子)

●土用の明けた日で、秋風の立ったのが何處となく木の葉のそよぎに見える。 (田舎教師)

●庭をながめていると、前よりは気分がだいぶ暗々した。曇った空をつばめが飛んでいるさまが大いに愉快に見えた。 (それから)

●また一人芸者が来た。これは背のすらりとしたなで肩の格好よくできあがった女で、着ている薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。 (吾輩は猫である)

〈 ～と きこえる (みえる) 〉の場合は、具体名詞や具体的な動作、できごと、現象がさしだされることが多いのに対して、〈 ～に きこえる (みえる) 〉の場合は、抽象名詞や、性質や形状をあらわす形容詞をとまなう名詞がさしだされることが多い。つまり、〈 ～と 〉の方は、確認した物事に対して、ある程度確定した自分なりの判断や見解がのべられ、〈 ～に 〉の方は、特性や特徴としてうけとめた、形容詞的な、感情評価的な態度がのべられているともいえる。このため、〈 ～に 〉の部分が、「に格の抽象名詞」なのか「な」でおわる形容詞の中止形なのか区別がつかない場合がしばしばである (上品に・愉快地・空虚に)。

また、たとえば「夫婦とみえる」・「夫婦にみえる」をくらべてみるとわかるが、この構造的なタイプの文において、〈 ～に 〉の部分に具体名詞を入れると、

その名詞が形容詞的な意味あいをおびてくる。前者が、確認した物事から判断した見解を〈〜と〉のなかにくだしているとすれば、後者は、確認した物事のなかから特性的なものをとりだし、〈〜に〉のなかにようすとして、評価的な態度として表現している。後者は、〈〜らしく〉という意味あいをおびていて、本当の夫婦ではなくてもかまわないことになり、〈〜のようだ〉というモーダルな表現に近くなってくる。しかし、いずれにしても、〈〜と〉でしめされる見解であれ、〈〜に〉でしめされる評価的な態度であれ、人間の主観的な判断によってなされた内容であるということ点では共通しているともいえる。

【〜の ように、〜らしく きこえる (みえる)】

主観的な判断や見解、評価的な態度をあらわすこの種の文において、〈〜の ように・〜らしく〉というかたちの場合、たとえや比喩のかたちで主観的な判断や見解の内容、評価的な態度の内容がさしだされ、ときには、その内容が推察的な判断となることもある。

●時々田端の駅を通過する電車や汽車の音が汐鳴りのように聞える丈で、此辺は山住いのような静けさだった。 (放浪記)

●清三が宿直に当たった時は、丁度月の冴えた夜で、垣には虫の音が雨のように聞えていた。 (田舎教師)

●丑松は昨夜の出来事を思出した。あの父の呼声を思出した。あの呼声が次第に遠く細くなって、別離を告げるように聞えたことを思出した。 (破戒)

●この周囲の寂しさにも関らず、岸本はもう一度自分の部屋の机に対して見た。灰燼の巷と化し去ることを免れた旅窓の外に見える町々も、変らずにある部屋の内の道具も、もう一度彼を迎えてくれるかのように見えた。ピアノを復習う音が復た聞えて来た。 (新生)

●白川からみれば十以上も若い筈の妻が時に姉のように見えて驚かされることがあった。(女坂)

●船が海上に出たせいか、薄陽の射した朝の桜島は、案外小さく紫色に健康に見えた。宿の部屋から見た桜島は幕を張ったように大きく見えたのだが、海上で見る桜島は、置物のように小さく見えた。(浮雲)

●なある程、水がゆれるとゆらゆらっと見えるわ。ああ安心した。……さっきはほんまに生きとると思うたが……やっぱ悪い事をしとると、気のせいでいろんなふうに見えるもんだ。……悪い事は出来んもんだなあ。(木下順二)

●女主人はうっとりと何か物を考えているらしく見えていたが、このことばを聞いて、岡田の方を見た。そして何か言いそうにして躊躇して、目をわきにそらした。(雁)

●するとお米と消が台所で働く音が、自分に関係のない隣の人の活動のごとくに聞こえた。(門)

【～して きこえる (みえる)】(動詞のなかどめ)

副詞化して様態をあらわす動詞のなかどめのかたちの場合にも、知覚によって確認した物事に対する、人間の主観的な判断や見解、感情評価的な態度が表現されることになる。

●悦子の声は冴々と澄んで聞こえる。(女坂)

●その日の琴は激切な調(しらべ)帯びて聞こえた。(春)

●二階の方から壁づたいに階段を降りて来る十六七ばかりの娘があった。ペア

クの祭の日らしく着更えた仏蘭西風の黒い衣装は、瘠(やせ)ぎすで、きゃしゃなその娘の姿によく似合って見えた。(新生)

●この丘の上から昼間は海がひらけて見えるのだが、今はただ狭い周囲に小松の幹が透けて見えるだけである。(くれない)

●その年はどこの柿もあたり年で、枝がたわんで木がひろがって見えるほど、実をつけていました。(壺井栄)

こうして、く ～のように・ ～のごとくに・ ～して きこえる(みえる)の構造的なタイプの文は、しだいにく ～のようだ)のタイプのモーダルな述語の文に近づいていくことになる。

【 ～く (～しく) きこえる (みえる)】(形容詞・副詞)

「い」でおわる形容詞のなかどめのかたちも、副詞化しながら、主観的な判断や見解の内容、評価的な態度の内容をさしだす。しかし、これらはもはや、知覚によって確認されたものに対する判断の内容というよりは、くそのように感じられる)という感情的な、評価的な態度の表現となっているともいえるだろう。

●彼は右を見、左を見して、初めてセエヌ河を渡った。……と同じブラタアヌの並木が両側にやわらかい若葉を着けた街路の中を乗って行った時は、馬丁の鳴らす鞭の音や石道を踏んで行く馬の蹄の音まで彼の耳に快く聞えた。(新生)

●彼は又自分に何時まで大阪に居る積かと聞いた。彼は旅行を断念してから、自分の顔を見ると能くこう云った。それが自分には遠慮がましくかつ催促がましく聞こえて却って厭であった。(行人)

く 勇ましく・物悲しく・いたましく・おかしく・楽しく・快く・凄まじく
おそろしく・寂しく・ありがたく・さわがしく・かまびすしく……)

●秋晴れと言って、このごろは東京の空も田舎のように深く見える。(三四郎)

●……いつものとおり静かな、しとやかな、奥行きのある、美しい女になった。
眉のあたりがことに晴れ晴れしく見えた。(それから)

〈美しく・うす青く・りりしく・優しく・寂しく・うす汚く・白く・遠く
重苦しく・若く・似つかわしく・小さく・誇りたかく・かわいく・広く
もろく・明るく・見苦しく・活気なく・平たく・ばかばかしく……〉

〈～と・～に・～のように・～らしく・～のごとくに・～く・～しく〉など
とくみあわせる、この種の〈きこえる・みえる〉を述語にする文は、知覚によ
って確認された物事や現象に対してどのように判断しているのか、その判断や
見解の内容をさしだしているものから、その物事や現象に対する人間の認識的
な態度の表現へ、さらに、人間の主観的な感情的な態度・評価的な姿勢へと、述
語のモーダルなタイプへと移行しているといえるだろう。

(4) 一般的な特性

確認される物事や現象が具体的な時間ではなく、一般的にみられるような場
合や、あるいは、確認する人間も一般化されているような場合には、〈きこえ
る・みえる〉を述語にする文は、それらの物事や現象が確認されるその〈場所
や時間そのもの〉のもつ一般的な特性をのべることになる。これらは人称やテ
ンポラリティの一般化にともなっておこる文の意味である。

【場所の特性】

●大抵は小学校からの馴染みなので、行田の友達の群よりも一層したい處があ
る。小畑の家は駐車場の敷地に隣って居て、其處からは有名な熊谷堤の花が見え
る。桜井の家は蓮正寺の近所で、お詣の鱒口の音が終日聞える。(田舎教師)

●「お民、来て御覧。きょうは恵那山がよく見えますよ。妻籠の方はどうかね

え、木曾川の音が聞えるかねえ」「ええ、日によってよく聞えます。わたしども家は河の直ぐ側でもありませんけれど」「妻籠ではそうだろうねえ。ここでは河の音は聞えない。そのかわり、惠那山の方で鳴る風の音が手に取るように聞えますよ」
(夜明け前)

●「それでも、まあ好い眺めですこと」「そりゃ馬籠はこんな峠の上ですから、隣の国まで見えます。どうかするとお天氣の好い日には、遠い伊吹山まで見ることがありますよ……」
(夜明け前)

●内から二三丁ばかり先は町である。そこに屋台が掛かってゐて、夕方になると踊りの囃子をするのが内へ聞える。
(キタ・セクスアリス)

●窓は四つある。その一方の窓からは、群立した松林、校長の家の草屋根などが見える。一方の窓からは、起伏した浅い谷、桑畑、竹やぶなどが見える。遠い山山の一部も望まれる。
(千曲川のスケッチ)

●丁度この下屋敷の直ぐ階上(うえ)に、硝子戸を開ければ町につづいた家々の屋根の見える岸本の部屋があつた。階下に居て二階の話声はそれほどよく聞えないまでも、二階に居て階下の話声は——殊に婆やの高い声などは手に取るように聞える。
(新生)

●同じ軒の下から谷を隔てて向うの山も手に取るように見えます。この山全体がある伯爵の別荘地で、時には浴衣の色が樹の間から見えたり、女の聲が崖の上で響いたりします。
(行人)

●そうなつた時に母屋の買手は、離れにどんな人が住んでいるか、必ず気にしますよ。離れと言つても、屋敷うちで、話声が聞えるほどだから、後では、母屋が売りにくいかもしれません。
(舞姫)

●新しい年を迎え顔な人達は祭礼の季節にも勝って楽しげに町々を往ったり来たりしていた。川蒸汽の音の聞えるところへ出ると、新大橋の方角へ流れて行く隅田川の水が見える。その辺は岸本に取って少年時代からの記憶のあるところであった。 (新生)

●九州亭というネオンサインを高く輝している支那飯屋の前まで来ると、改正道路を走る自動車の灯が見え、蓄音機の音が聞える。 (シ墨東綺談)

●この路地の中にはすぐ伏見稲荷の汚れた熾が見えるが、素見ぞめきの客は気がつかないらしく、人の出入は他の路地口に比べると至って少ない。 (シ墨東綺談)

【時間の特性】

●田植え時分には、雨が蕭々(しょぼしょぼ)と降って、こねかへした田の泥濘(どろ)の中に低頭いた饅頭笠いくつとなく並んで見える。好い声でうたふ田植唄も聞える。 (田舎教師)

●今夜は太子堂のおまつりで、家の縁側から、前の広場の相撲場がよく見えるので、皆背のびをして集まって見る。 (放浪記)

●そしてその風の吹く時には、きっと福浦岬から続いた海中に加賀の白山がくつきりと聳(そび)え立っているのが見えるのでした。その外の時には大抵、空の色合や、雲の具合で見えないのが普通でした。「白山が見えると、南東風(くだり)が吹く、海が荒れる、船が難破する、そして人が死ぬ。」 (赤い鳥)

●「白山が見えたって、お前。」
「それでも、暴風(しけ)になる時には、いつでも白山が見えるもの。」 (赤い鳥)

【物の特性】

- 「妙貞さんのお墓は、いま萩の花ざかりよ。妙貞さんの石碑はこんなに小さいのよ。」萩江は右手を出して地上五十センチぐらいの高さを示し、「だからよく気をつけてみないと、萩の花にかくれて見えないのよ。りっぱな萩。」
(壺井栄)

- 子供は正太。正太の家はすぐかなたにあった。クルリと樹を一廻りすると、かなたに見えるのが正太の家だ。
(坪田譲治)

この種の、確認する人間が一般化され、時間が一般化された〈きこえる・みえる〉が名詞かざりの修飾語の位置におかれると、その場所や物の特性をあらわす形容詞的な役わりをはたすことになる。

- 時折、警笛の聞えてくる郊外電車は、川のずっと北方を走っていて、これは東京から外へ、川越の方まで行っている。
(くれない)

- 馬小舎のように、境の壁がついたて式になっていたので、どんな物音も筒抜けに聞える粗末な部屋だった。
(浮雲)

- 丁度この下座敷の直ぐ階上(うえ)に、硝子戸を開ければ町につづいた家々の屋根の見える岸本の部屋があった。
(新生)

- 雨は細引を流したように激しくなり、廊下から見える海も山も、一面のもやのなかに景色を隠していた。
(浮雲)

- 海が見えた。海が見える。五年振りに見る、尾道の海はなつかしい。汽車が尾道の海へさしかかると、煤けた小さい町の屋根が提燈のように拡がって来る。赤い千光寺の塔が見える山は爽かな若葉だ。
(放浪記)

- 夜の十一時頃には雨が降出して、窓から外に見える並木も暗かった。(新生)
- 丁度駅からは、はすかひに見える蕎麦屋ののれんをくぐった。 (浮雲)
- 一行はホテルの部屋へ案内された。運河の見える、ござっぱりした階下の部屋に、篠井春子と幸田ゆき子は通された。 (浮雲)
- 電車の窓から見える城東の労働者街の空は小雨にけぶり、いよいよ暗たんとしていた。 (くれない)
- 彼は姪へ送るためにサン・テチエンヌ寺の遠景に見える絵葉書を選び、泉太に送るために羊の群の見える牧場のついた絵葉書を選んだ。 (新生)
- 見ると、なんとなく活気がない。また音ひとつきこえてこない町であります。(小川未明)

つぎのようなものは、その時間の特性をあらわす形容詞的な役わりをはたしていることになる。

- まっ黒な、星も見えない、雨の降る晩に、波の上から、赤いろうそくのともしびがただよって、だんだん高くのぼって、いつしか山の上のお宮をさして、ちらちらと動いて行くのを、見た者があります。 (小川未明)
- 汽車の窓からヴィエンヌ河も見えなくなる頃は、秋雨も歇(や)んだ。(新生)
- 月のあかりに、野いばらとうつぎの白い花がほのかに見えている村の夜を、五人のおとなの盗人が、一びきの子牛をひきながら、子どもをさがしていくのであります。 (新美南吉)

- 外へ出て見ると、風は全く歇んだが、月も星も見えない静かな晩を、電燈が少しばかり照らしていた。(それから)

(5) 現象の非実現の確認 (実現の非確認)

過去におこった物事や現象、いまおこっている物事や現象を具体的な時間のなかにとらえるのが〈実現したこと・していることの確認〉であるとすれば、うちけしの文は、〈実現しなかったこと・していないことの確認〉をあらわすことになる。

- 呼んで貰った俵が来た。岸本は自分の家を指して深夜の都会の空気の中を帰って行った。東京の目貫とも言うべき町々も眠ってしまって、遠くまで通う電車の響も絶えていた。広い大通りは往来の人の足音も聞えなかった。(新生)

- 鋭敏な彼の耳は、不図誰か階段を下りて来るような足音を聴いた。彼はすぐじゃぶじゃぶやる手を止めた。すると足音は聴えなくなった。然し気の所為か一旦留まったその足音が今度は逆に階段を上って行くように思われた。(明暗)

- 今戦争は、ずっと遠くでしているので、たとえ耳をすましても、空をながめても、鉄砲の音もきこえなければ、黒いけむりのかげすら見られなかったのがあります。(小川未明)

- 須永とこの女がどんな文(あや)に二人の浪漫を織っているのだらうと想像するつもりであったが、やはり聞き耳は立てていた。けれども内はいつものとおり森としていた。艶めいた女の声どころか、咳嗽(せき)一つ聞こえなかった。(彼岸過迄)

- ところがきのうと違って、門をくぐっても、子供の鳴らす太鼓の音は聞こえなかった。玄関にはこの前目につかなかった衝立が立っていた。(彼岸過迄)

- 電燈で照らされた廊下は明るかった。何方の方角でも行こうとすれば勝手に行かれた。けれども人の足音は何処にも聴えなかった。用事で往来をする下女の姿も見えなかった。(明暗)

〈きこえた・きこえる〉の文が物事や現象の実現を知覚によって確認していることを表現しているとすれば、〈きこえなかった・きこえない〉の文の方は確認していないことを表現する文の形式ということになるはずなのだが、実際の文の多くは、実現しなかったことの確認の表現となっている。この種の文では、非知覚は〈非存在という確認〉から〈非存在という判断〉の表現の文となっている。知覚的な非確認は、非存在という判断につながっている。

- (三男) 鳴るよ。……じつときいてると、いっぱいなるよ。……風の音や笛の音がするよ。……たくさんの音がするよ。どこか遠くの方へ消えていくよ。

(長女) うそよ。なにもきこえやしないわ。(新美南吉)

- しかし下女はついに出て来なかった。平岡の影も見えなかった。塀のそばに寄って耳を澄ましても、それらしい人声は聞こえなかった。(それから)

- 西の空にはわずかに黄色が残っていた。鳥の声一つ聞こえなかった。

(千曲川のスケッチ)

- 石原は岡田のそばを離れて、案内者のように前に立った。僕は今一度振り返って見たが、もう女の姿は見えなかった。(雁)

- そのうち横須賀線の電車がはいってきた。これは十三番線だから、この電車のために、十五番線のホームはかくれて見えなくなってしまった。(点と線)

- 畑の垣根をなおしながら、和太郎さんは、おかあさんを見送っていました。お

かあさんが見えなくなると、つつじの赤が、和太郎さんの目にしみました。

(新美南吉)

- 敬太郎はあの車のあとについていけと命じた。車夫はへいと言ってむやみに駆け出した。……車夫はまた梶棒を留めて、旦那どっちへゆくんですと聞いた。男の乗った車はいくら幌の内から延び上がっても影さえ見えなかった。

(彼岸過迄)

- まだ朝のことで、他に客も見えない。

(春)

- その庭に、このあいだまで重そうな赤い強い色をぼたぼた点じていた櫛の花はもう一つも見えなかった。

(こころ)

〈みえない〉という表現は、〈いない・存在しない〉という意味の表現につながっている。しかし、この種の多くの文がこのようなことを表現しているとしても、つぎのような文では、存在しているのは事実なのだろうが確認できないということが表現されている。〈きこえない・みえない〉のようなくちけしの文では、物事や現象がないことを確認する〈非実現の確認・非存在の確認〉の場合と、その物事や現象を人間が確認できない〈実現の非確認〉の場合と区別する必要があるのかもしれない。

- 舟と舟とは次第に遠ざかる。後ろには餌を待つ雛のように、二人の子供がいた口が見えていて、もう声は聞こえない。

(山椒太夫)

- 教室へ入って、読本を出したのですが、先生の言葉も聞えず、目の前の読本の字も見えず、ポケットの中でにぎっている笛にばかり気をとられておりました。

(坪田諷治)

- 「ね、兄チャン、ちょっと兜かぶって見ようよ」三平にはお爺さんの笑いな

んか聞えない。まして、お母さんの、「三平チャン、そんなこといけませんよ。まだご挨拶もしないんでしょう」なんて声は聞えない。床の上にあがって、もう兜に両手をかけている。
(子供の四季)

- 廊下へ出て耳を澄まして見たが、三味線は聞こえても、やっぱり歌がよく聞えない。が、いよいよ例のに違いないから、わたしは意を決して…… (平凡)
- 純一は「ええ」と云った憤りであったが、声はいかにも均衡を失った声で、しかも殆ど我耳さえ聞えない位低かった。
(青年)
- 「妙貞さんのお墓は、いま萩の花ざかりよ。妙貞さんの石碑はこんなに小さいのよ。」萩江は右手を出して地上五十センチぐらいの高さを示し、「だからよく気をつけてみないと、萩の花にかくれて見えないのよ。りっぱな萩」(壺井栄)
- 「おっかさんおっかさん！」といきなり内へわめき込んだが、母の姿は見えないで、台所で返事がする。
(平凡)
- ボンソア……と挨拶している女の声がしている。薄い雲が星をかいくぐって流れている。湖は見えない。
(浮雲)
- 成吉可汗の立っているところからは見えなかったが、その岩山の向う側の斜面に於て、長城の廻廊はそこだけ蛙でも飲み込んだ蛇の腹部のように大きくふくれ上がり、昨夜から攻防の死闘が繰返された城砦を形成している筈であった。
(蒼き狼)
- (長女) あら、ほんとうに旗が出たわ。雲の下を、北の方へ流れていくわ。……ああいま、学校のうしろの山の上ころよ。あら、山のとっぺんで、だれかが旗の方に手をふっててよ、……もう見えなくなっちゃった。
(三男) 山の上にだれがいるの？

(長女) だれだかわからないわ。

(三男) 先生じゃないの。

(長女) 見えやしないわ、そんなことまで。

(三男) だめだなあ、おねえさんの目なんか。 (新美南吉)

しかし、それらが〈非存在の確認〉なのか〈存在の非確認〉なのか、何とも区別のしようがない場合も多いのかもしれない。抽象的なことがらの場合はとりわけ区別がつかない。

●倉持は……やって来ると三味線をひかせておぼこ節など唄って騒ぐくらいで、手もかからず、気むずかしいところも見えなかった。 (縮図)

●照りつけられたせいで、三千代の頬が心持ちよく輝いた。いつもの疲れた色はどこにも見えなかった。目の中にも若いつやが宿っていた。 (それから)

●今までのお勢の挙動(そぶり)をおもい出して熟思審察して見るに、さらにそんな気色は見えない。 (浮雲)

●……はいつて来た。そうして帯を解きだした。三四郎といつしょに湯を使う気と見える。別に恥ずかしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽(ゆぶね)を飛び出した。 (三四郎)

【2】文の意味的な系列の移行の多様性

〈きこえる・みえる〉を述語にする文について、それらの意味的なタイプを記述してきたが、文の人称性や時間性とかかわりながら、これらの文は、少しずつ移行し、連続的な意味的な多様性をつくりだしている。物事の存在や現象の実現を確認する文から、判断や予想、あるいは主観的な想像をあらわす文への移行、認識や判断の内容をあらわす文からモーダルなタイプの文への移行、確認する主体の一般化や時間の一般化にともないながら特性を表現する文への

移行、非確認の表現の文から非存在の表現の文への移行など、〈きこえる・みえる〉を述語にする文は〈確認を表現する文〉から出発しながら、その意味的な移行の姿は一方向的ではなく、多様である。

- (1) 現象の実現の確認・物事の存在の確認・人間の動作の確認
 - ・過去や現在の特定の時間でなされていることを確認する
- (2) 現象の確認に対する判断や予想・主観的な想像
 - ・未来のことがら、二人称のことがら
 - ・主観的な想像や判断
- (3) 認識や判断の内容
 - ・～と きこえる (みえる)
 - ・～に・～のように・～らしく (ごとく)・～して・～く (しく)
 - (モーダルな述語への移行)
- (4) 一般的な特性
 - ・場所の特性、時間の特性、物の特性
- (5) 現象の非実現の確認 (実現の非確認)・非存在の確認 (存在の非確認)
(非存在の表現への移行)

〈きこえる・みえる〉を述語にする文の意味的なタイプとして、この報告では上記のようなものを記述してきたが、この種の文をモーダルなタイプの全体的な体系のなかにどのように位置づけ、整理していくかも大切な課題である。今後はさらに、〈きく・みる〉を述語にする意志的な知覚活動をあらわす文、〈きける・みれる (みられる)〉〈きくことができる・みることができる〉を述語にする可能表現・実現表現の文、〈きかれる・みられる〉を述語にするうけみ構造の文などに関係づけながら、具体的な検討をしていく必要があるだろう。

【おわりに】

「うけみ構造の文」「やりもらい構造の文」というヴォイスの研究においては、アスペクトと人称性の研究との関連が必要になり、「命令文」の研究においても、モダリティと人称性の研究との関連が必要になる。「文の人称性」のテーマにとりかかったのは、「うけみ構造の文の意味的なタイプ」（1997）を『ことばの科学9集』に載せていただいてからすぐのことであるから、奥田先生が病に倒られる前のことである。「文の人称性について」（2001）、「文の人称性（その2）— 3人称文・一般人称文・無人称文—」（2004）、「文の人称性について」（2006『ことばの科学11集』）、「文の人称性について」（2008）と報告させていただいたあと、さらに、「自動詞のうけみとやりもらい構造の文」（2009）、「うけみのなかどめ — 文のひとまとまり性 —」（2010）、「文を部分にわけることの意味（2010）」、「きこえる・みえるを述語にする文」（2011）と、文をテーマに報告させていただいている。陳述性によってささえられている〈文のひとまとまり性〉の問題と〈文の内部構造〉の問題がつねにこれらにはつきまとっている。奥田先生が亡くなられてからもう10年になる。先生がさしだしてくださった〈文の陳述性の構造〉の問題について、具体的な用例にもとづいた記述と検討の仕事がつづいていく。

※これは、奥田靖雄没後10年シンポジウム（2012.3.25）で報告したものであるが、このシンポジウムでの報告のまえに、昨年の新潟の言語学研究会でおこなわれた夏の合宿研究会の場で発表し、検討していただき、さらに冬の教科研国語部会の集会の場でも発表し、検討していただいている。わたしの毎年の報告は、いつもこうやって言語学研究会のメンバーの方々や教科研の仲間から目をとおしていただいて、いろいろと教えていただいている。例年のことではあるが、とてもありがたいことで感謝している。今回はさらに、わたしの手もちの資料カードが足りないということをお話したところ、言語学研究会の財産である語彙研究用の資料カードのなかから、たくさんの〈きこえる・みえる〉のカードを貸していただいた。本当にありがたいことであった。資料がふえることで、はじめの報告のときよりも、一般化するための道すがらみえてきた思いがする。まだ十分に分析整理がなされているとはおもえないが、こうやって報告のたびにご指摘をいただけることはとてもありがたいことである。